このひと

日本分析化学会会長に就任される

大谷　肇　氏

(Hajime Ohtani
名古屋工業大学産学官金連携機構客員教授)

1980 年名古屋大学工学部卒業．同大学大学院工学研究科博士課程を経て **1985** 年工学博士（名古屋大学）．**1986** 年名古屋大学工学部助手．**1995** 年名古屋大学理工科学総合研究センター助教授．**1998** 年名古屋大学大学院工学研究科助教授．**2005** 年名古屋工業大学大学院工学研究科教授．**2023** 年名古屋工業大学産学官金連携機構客員教授．**2016**，**2017** 年「分析化学」論文賞．**2019** 年日本分析化学会学会賞．**2008**～**2009** 年度日本分析化学会高分子分析研究懇談会運営委員長．**2013** 年度日本分析化学会中部支部長．**2020** 年日本分析化学会第 **69** 年会実行委員長．**2020**～**2022** 年度日本分析化学会副会長．

このたび名古屋工業大学の大谷肇先生が日本分析化学会の会長に就任されました．お祝いの気持ちを込めつつ，先生のキャリアやお人柄をご紹介致します．

上記の略歴にありますように，大谷先生は 1986 年に名古屋大学 柘植新先生の研究室の助手に就任され，プロとしての研究キャリアを開始されました．私もその 5 年後に卒研生として柘植研究室に配属され，大谷先生の指導を直接受けることになります．学生指導の点で振返ると，的確なアドバイスを与えつつ，常に温厚な態度でもって学生と接するのが先生の持ち味でした．私自身，その日の実験がうまくいかない時にも，先生の大局的な視点に立った，穏やかな口調での助言に安心感を覚え，翌日の実験に向けて奮起した記憶があります．その後，名大の助教授，そして名工大の教授とキャリアを積まれましたが，常に学生に寄り添った教育方法はブレることなく変わらなかったと聞き及んでおります．一方で研究面では，ご専門である高分子の熱分解分析法を，ポリマーの熱分解メカニズムの解明や熱分解以外の多彩な分解場の構築なども総合した，一大学問体系にまで高められました．さらに，最先端の質量分析法の技術開発にも携わりながら，国内外の高分子分析の分野を長年けん引されてきました．その間，実行委員長として，当該分野にかかわる国際会議やシンポジウムを多数開催されており，その円滑な運営に振るわれた手腕や実行力は今回の会長職でも遺憾無く発揮されることと思います．

次に，大谷先生のお人柄についても少し触れてみます．私の印象ですが，先生の周りには常に人の輪ができているイメージがあります．ご自身の講演会やその後の懇親会ではもちろんのこと，学会でのちょっとした幕間の時間など至るところでそういう場面が見られます．失礼ながら，決して多弁でもなくトーク力が高いとも思えない（本当に失礼ですね，すみません）先生がいつも人の輪に囲まれている，その理由こそ上述した学生指導でも見られた，先生の暖かいお人柄に因（よ）るものと思います．そうした性分が自然と周りにも伝わり，いつも頼られる存在として話題の中心にいらっしゃる気がします．

その一方で，核心を突いた鋭い情報発信も大谷先生の天分と云（い）えましょう．会議や委員会にて議論が行き詰った時，先生の発言でもってその場の雰囲気が好転し，歯車も噛み合い出し，さらには物事が具体的に動き出す，そんな場面を私は何度も目にしてきました（首肯される方も多いのでは）．他者との温和な関係を容易に築ける暖かい人柄に加えて，事態の改善につながる言葉の発信力と，その内容を具体化する実行力．それらをバランスよく備えていることが組織を動かすリーダーには欠かせない要素であり，このたび大谷先生が会長に選出された理由であると私は思っています．

唐突ですが，私が所属する中部大学には「不言実行－あてになる人間」という建学の精神があります．この言葉には，「思うことを行為にあらわすことによってはじめて人間の価値ができる」という本学創設者の想いが込められています．この建学の精神に接して私がまず思い起こしたのが，上述したような大谷先生のお人柄や性分です．本学会が進めてきた改革の促進を，会員間の互恵性も維持しながら実行する大役には大谷先生以外に適任者は考えられません．激務に当たられますので，お体くれぐれもご自愛下されば と願いつつ，先生の今後のご活躍をお祈り申し上げます．

〔中部大学応用生物学部　**石田 康行**〕